

おいでん・さんそんSHOW

2月号
2018.02.01発行

特集|豊森なりわい塾が、第3回豊森ギャザリング開催

幸せの形を、仲間と一緒に考える



ギャザリングでは、「豊森でシアワセになった!」をメインテーマに卒業生たちがぐるま座になって話し合った

1月20日(土)、豊田市民文化会館で、第3回豊森ギャザリングが行われました。豊森なりわい塾は、NPO法人地域の未来・志援センター、トヨタ自動車株式会社、豊田市の3組織が協働して2009年にスタートした。山村をフィールドにした人材育成プログラムで、センターも実行委員として支援しています。ギャザリングは、卒業生たちが集まり、卒業後の活動などを共有しながら、プログラムに参加した年度を越えつながりを生んでいるイベントです。

会場には、第1期から第6期までの卒業生と、今年度の塾生である7期の85人が集まり、「豊森でシアワセになった!」をメインテーマに、8つのテーマ別にグループに分かれ、実践報告とグループトークが行われました。

大野高明さんの場合
おののあきみ
第4期の卒業生大野高明さんのテーマは、「都会の中で、好きなことをどうやって仕事にするのか。」

大野さんは大学院を卒業後、金融関係の仕事をしていましたが、地域に根ざし、地域の人の顔がみえる学びの場「大ナゴヤ大学」の活動にボランティアで



午前中に同会場で、7期生の講座が行われた。テーマは「江戸のくらし」

第6期卒業生の杉森奈那子さんのテーマは「なつてみて感じる地域おこし協力隊の存在意義」。

杉森さんは、2017年の春

杉森奈那子さんの場合
すぎもりなこ

同じグループの第1期卒業生の中上嘉文さんは、縁農など縁のある農家さんでのお手伝いや販売等の多業を行っている。中上さんは「オンラインワンの活動を進めれば進めるほど、お金につながるものがみつかった」と語っていた。

携わるようになり、「まちのことをやりたい」という思いが高まり、NPOの代表という生き方を選択しました。「仕事バー」や「よつかめ文化祭」などの取り組みを行い、自分のやりたいことを稼ぎに変えていくための仕組み作りを行っています。やりたいことと、お金と時間の使い方のバランスを取りながら、日々の暮らしの可能性を探っています。

1月11日は私の65歳の誕生日だった。統計上高齢者の人口と高齢化率を引き上げたことになり。白髪は増えたが体の変調もなければ心情の変化もない。子どもの頃、青年だった頃見てきた「おじいさん」になったのに全く実感も自覚もない。不埒な高齢者だが、これは幸せなことなのだと思う。

空き家情報バンク制度を駆使して子育て世帯の移住が相次ぐ旭地区では、新たな議論が始まっている。子育て世帯に加え、通常は「地域面談」で大方振り落されてしまう50代後半から60代

高齢者の増加は、医療、福祉予算の増加をもたらすネガティブな要因として社会に歓迎されていないが、地域運営の現場では担い手としてなくてはならない存在である。

地域の担い手世帯の移住を進めようというのである。移住者といえども、5年も経てば地域の中心的な担い手として要職に就かざるを得ないが、彼らは仕事と子育ての真っ只中にあり、多忙を極めていることから生まれた新たな地域課題である。数年前まで、地域の消滅を回避するために子育て世帯の移住を議論していた地域が、高齢者の移住を議論するまでになったので

あるから見上げたものだ。いまだ、なんとかなるよいうにしかならないと考えている地域をよそ目に、旭地区は突っ走る。IT機器も何とかこなせるし腰も曲がっていないれば知恵も経験も豊富な「アクティブシニア」が持続可能な地域づくりのキーワードになるかもしれない。

2017 第9回 アクティブシニア

センター長のミライのフツに 向かって!



センター長 鈴木辰吉

高年齢者の増加は、医療、福祉予算の増加をもたらすネガティブな要因として社会に歓迎されていないが、地域運営の現場では担い手としてなくてはならない存在である。

地域の担い手世帯の移住を進めようというのである。移住者といえども、5年も経てば地域の中心的な担い手として要職に就かざるを得ないが、彼らは仕事と子育ての真っ只中にあり、多忙を極めていることから生まれた新たな地域課題である。数年前まで、地域の消滅を回避するために子育て世帯の移住を議論していた地域が、高齢者の移住を議論するまでになったので

あるから見上げたものだ。いまだ、なんとかなるよいうにしかならないと考えている地域をよそ目に、旭地区は突っ走る。IT機器も何とかこなせるし腰も曲がっていないれば知恵も経験も豊富な「アクティブシニア」が持続可能な地域づくりのキーワードになるかもしれない。

イベント情報

WELOVEとよたフェスタ~世界一わくわくするたのしいふるさとを目指して

●内容:「WE LOVE とよたフェスタ」は、とよたに関わるみんなが、普段こんなことできたらとよたがもっと面白くなるかも!?とと思っていることにチャレンジしたり、普段頑張っている活動を発表したり、とよたで何かしたいな!って思っている方々に自分たちの活動の内容を知ってもらい、新たな仲間作りをしたり、とよたの魅力を知り、みんなで本気で楽しんだり。そんな世界一わくわくするたのしいふるさとを目指してみんなで作りあげるイベントです。とよたが好きになるきっかけがいっぱいです。一緒にわくわくしませんか?

●日時:2018年2月25日(日) 10:00-15:30

●場所:スカイホール豊田(愛知県豊田市八幡町1丁目20)

●主催:WE LOVE とよたフェスタ実行委員会

●問合せ:メール

promo.t@toyotasu.com

電話 080-9111-3339(とよたプロモ部)

●備考:情報は、随時WEBに公開されます。www.welovetoyota-festa.com



企業x地域=わくわく~平成29年度社会人のための地域参加促進事業

●内容:豊田市内の企業における社会貢献活動が様々な展開をみせています。取組の内容はたくさんありますが、そもそもなぜ「社会貢献活動」をやるのでしょうか、他の企業はどのようなことをしているのでしょうか。このセミナーでは、全国的な活動取組みや動向、豊田市内での活動事例、企業経営者からみる取組み視点などを学び、地域に存在している課題やニーズをどのように掛け合わせるかを探ります。『わくわく』するような、地域に根差した活動を一緒に考えてみましょう。(WELOVEとよたフェスタの一環で行われます)

●日時:2018年2月25日(日) 13:00~14:30

●場所:スカイホール豊田大会議室

●申込・参加費:不要(当日先着150名の受付)

●パネリスト:長沢恵美子氏(経団連教育・CSR本部統括主幹1%クラブ事務局次長)、坂元貞仁氏(株式会社キョウエイファイン代表取締役)、中田繁美氏((社福)豊田市社会福祉協議会事務局次長(兼)地域福祉課(ボランティアセンター)課長、鈴木辰吉(一般社団法人おいでん・さんそん代表理事)

●ブース出展:ブースでは多くの企業が出展し、社会貢献活動に関する取組を担当者から説明をします。「何をやればいいのかわからないなあ」、「一緒に活動できる企業はないかな」という地域や企業のニーズを掛け合わせて、『わくわく』するブース出展になっています。

●主催:社会人のための地域参加促進事業実行委員会

●問合せ:豊田市社会福祉協議会地域福祉課 TEL:0565-31-1294

MAIL:vc@toyota-shakyo.jp WEB:http://toyota-shakyo.jp/volunteer/

その他の情報は、センターHPをチェック!

REPORT



しいたけの原木づくりを実習

第3回伐採からはじめる原木しいたけ栽培研修に15名が参加



1月19(金)、20日(土)に、日下部町(旭地区)の雑木林で「第3回 伐採からはじめる原木しいたけ栽培研修」を開催しました。

講師は、下山地区の原木しいたけの第一人者である、近藤一義さん。15人の受講生は、山主・Uターン者・定年退職された都市住民など様々で、今後生産者を目指している方々です。

今回は、前回伐倒したコナラ・アベマキの玉切り作業。上手くやれば小枝部でもしいたけは発生するそう、手間をかけ多くの原木づくりを実習することができました。

次回の第4回研修は、植菌作業(原木に種菌を打ち付けること)です。近藤講師から、

「原木の乾燥具合は最高の状態。一人100本の原木を持ちかえると収穫に困るぐらい発生するでしょう。」と話があり、参加者の意欲も一層高まった研修会となりました。(坂部友隆)

REPORT



子育て連続ワークショップ開催

兄弟姉妹・ひとりっこの特性について学ぶ



1月10日(水)、子育て連続ワークショップ『もつと子どもを好きになる』2回目を行いました。学びのテーマは「兄弟姉妹・ひとりっこ～生まれた順番・性別から来る特性を知ろう」。同じように育てているつもりでも、まるで違う子どもたち。

この日の学びでは、兄弟姉妹の順番や性別による特徴と、それに対して考慮する点などを学びました。また親子関係の苦しさの裏側には、親自身の家族間の葛藤があることも。

自分を見つめる作業は苦しいですが、誰にも否定されない貴重な時間を過ごしています。最終回の次回は2月14日です。(小黒敦子)

REPORT



三河の山里起業実践者報告会

本番に先立ち豊田市山村部の実践者が発表



発表の様子

1月22日(月)、足助支所で、平成29年度三河の山里起業実践者報告会が行われ、17名が参加しました。「三河の山里起業実践者」とは、三河山間地域において、ビジネスプランを持ち、本気で起業に挑戦する8名を対象に、愛知県と地元市町村などが連携してサポートする取組みです。2017年6月から支援を受けた8名が、1月30日(火)に、新城市で報告会を行うのに先立ち、豊田市の山村部在住の起業実践者、佐伯朋美さん、庄司知教さん、清水潤子さん、石橋徹さんの4名が、報告を行いました。

佐伯さんは、「人によりそう」を理念にした写真撮影と、看護職従事者を対象にしたヨガレッスンの事業、庄司さんは、地域材を

使ったセミオーダーの小さな小屋の開発事業、清水潤子さんは、捕獲した獣をジビエとして活用することで、命を無駄にしないことを理念とした、ジビエカフェの運営、石橋さんは、稲武地区にある道の駅「どんぐりの里いなぶ」を販売の出口として新規就農者を支援する営農組合「ファームいなぶ」の事業構想を、それぞれ発表しました。

4名の方の事業計画の報告を聞き、参加者からは、実際に事業を進める上での具体的な場所、進め方などについて、アドバイスや質問が次々と出ていました。どの事業も、実現すれば豊田市の山村部がより充実した地域になる内容ばかり。センターも、しっかりと 応援をしていきたいと思います。(木浦幸加)



①-④:くるま座談義の様子
⑤当日出席できなかった卒業生の様子も、近況報告用紙を掲示して情報共有できるように工夫されていた

から長野県栄村の秋山郷に、「自然と向き合いながら地域と自治をつなぐ」という熱い想いを持って地域おこし協力隊として移住しました。地域から期待されることと、実現するまでの壁を越えられないなかで、諦めかけたこともあったが、キャンドルイベントの実行委員長を務め、少しずつ地元の若い人たちと関わるようになったそう。観光シーズンに合わせたカレーの販売など「自分の思うことをとにかくやってみよう」と動くことで、それを応援してくれる人たちとの関係もできたそうです。「声は大きくなくても、熱い想いを持っている方もいることがわかった」と語り、小正月の行事である

「どんと焼き」を守るおじいちゃん、の背中が印象的な写真を、披露してくれました。
木下貴晴さんの場合
同じく第6期の木下貴晴さんのテーマは「なぜ専業農家を始めたか」と思っていた。木下さんは、森林組合を退職し、農家の研修を経て、春から自立して下山地区で農家を始めました。「今後さらに増えいく耕作放棄地をなんとかしたい」という想いを抱いていると言います。元々はほとんど水田の場所を畑にするので、当初の数期間は土がでないことを想定しながら、個人宅配の野菜セット販売などで、自立して食べていけるよう出て来た」と構想しています。中山

間地で行うことで、農閑期やシカ、イノシシなどの獣害も想定されるので、加工品など、冬の稼ぎの切り口も模索しながら、中山間地域で行う農業のモデルづくりを始めようとしています。
地域に関わる卒業生たち
豊森なりわい塾で山村の暮らしから幸せの形を学んだ塾生たちは、卒業を契機に新たな生き方を選択した人が多く、山村や農にも関わる暮らしや都市においても自由な暮らしを選択していることが伺えました。
塾長の濫澤寿一さんは、「人はそれぞれ違う。幸せの形もみんな違う。自分がどこにいるのか、どこに向かうかということ、間違いなく自分の頭の中しかない。すでにみなさんの頭の中にあるものを、どう探し出していかかという旅を、僕たちはこれからしていくのだと思えます。また、何年かに一度、こうやって集まれば、その鍵を見つければ、ヒントを仲間からもらうことができるんだらうな、と思っています」と語りました。
豊森なりわい塾は、来年度の第8期で10年目を迎え、4月8日(日)には募集説明会があります。地域づくりを牽引する人材が益々増えることが期待されます。(取材:文/田中敦子)

REPORT



ミライの職業訓練校報告会



仮説転がしの次のステップへ、進展

1月14日(日)、平成29年度のミライの職業訓練校の報告会を豊田市のまちなかにある「地域と若者がゆるくつながる場kabo。」で行い、今期の受講生7名のうちの3名が報告をしました。ミライの職業訓練校は山里で生きるための必要な技を学び、仲間とともに実践し、切磋琢磨しながら山里で生きる糧を身に付ける学びの場。地域スモール

ビジネス研究会が主催しています。日頃感じる「モヤモヤ」をスルーせず、次のステップへのヒントとして育てることから始め、何がしたいのか仮説を建てて実現に向けた歩みを受講者お互いでサポートします。3名の報告からは、仮説を転がして、次のステップへの展望が開けそうな様子が伺えました。今期の受講生は田舎で暮らしたいという志



向の参加者が多く、田舎に引っ越す予定がある人、具体的な候補地が挙がって計画を進めている人、家族や仕事を考えて2拠点居住を念頭により関係性を作りに田舎に通う人がいます。それぞれに、気付きや紆余曲折があり、現在に至ったようです。1期2期の受講生も報告会に参加し、受講後の展開や状況などを共有してくれました。(西田又紀二)